

コロンブス交流におけるアフリカの植物

ジュディス・カーニー (UCLA)

訳 松尾容孝

- I. 序論
- II. アフリカにおける農業のドメスティケーション (栽培化・飼育化) とモンスーン交流
- III. アフリカの植物の南北アメリカへの伝来: 「奴隷によってもたらされた」作物
- IV. 結論

I. 序論

1492年に続く数十年間はヨーロッパ人が大航海を展開した時代の幕開けで、植物が地球の向こう側へ移動するようになった。16世紀から19世紀までの間、ヨーロッパ人は世界のある地域から別の地域へ作物群をもたらした。その過程を、歴史家アルフレッドW.クロスビー Alfred W. Crosby が *Columbian Exchange* (コロンブス交流) と呼んだことはよく知られている^(訳注)。クロスビーはその著『生態学的帝国主義』のなかで、植民地の行政官、科学者、植物園のような機関の従事者とは異なる普通の人々が移住した結果として生じた二次的な植物の交流に注目した。オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカに移住したヨーロッパ人に随伴した動植物相は、永遠に、移住者のコロニー (定住地) の景観を変え、クロスビーの言葉を借りれば、コロニーを「新ヨーロッパ」へと一変さ

せた¹⁾。

しかしながら、大陸間の植物交流に関する文献はコロンブス交流の間に起こったインフォーマルながら重要な移動を説明することができていない。このような移動として、新大陸の熱帯で生じ、熱帯アフリカから伝来した植物群が該当する。アフリカから伝来したこれらの植物群は、新大陸のプランテーション経済の食料耕地で最初に出現した。それらの農作物が定着したのは、何百万もの奴隷アフリカ人と同じように、強制的にはあるが移住させられた結果として生じたのである。アフリカの主要食料が奴隷たちの南北アメリカへの移動に随伴したのである。多くは熱帯作物で、そのなかにはヨーロッパ人には未知の植える農法もあった。生存 (自給) のためにアフリカから持ち込まれた植物の栽培が始まったことによって、奴隷たちは新大陸と旧大陸の両熱帯の植物的遺産をひきあわせ、新大陸のプランテーション社会の食物状況をアフリカ風にした。

アフリカの植物が伝来したこととその定着に奴隷が果たした役割を強調するとともに、本稿は、コロンブス交流の3つの仮説を検討する。第一の仮説は、広く大陸間の植物移動を議論する際にアフリカの植物が相対的に無視されてきたことにかかわっている。第二の点は、アフリカの作物のプランテーション経

キーワード: アフリカ, コロンブス交流, 食用作物, プランテーション, 奴隷貿易

済への導入の説明において、ヨーロッパ人が果たした役割にこれまでの文献が関心を集中してきたことへの疑問である。第三の点は、大陸間の作物移動の議論においてアフリカがどのようにして周辺に迫いやられるのかに関する点である。拡大するヨーロッパ領土に随伴する植物に関する議論では、生存の糧（自給）について考察することはほとんどなされていない。しかし、台頭する大西洋経済を支えた食料が示すように、アフリカ大陸とアフリカの諸民族は、大洋を越える種の移動にとって決してマージナルと言える程度の存在ではない。

したがって、私は本稿の議論を2つに分ける。前半では、先史時代にインド洋を横切ってアジアに渡ったアフリカの植物を歴史的に概観する。後半では、大西洋を横切ったアフリカの作物を特定し、その大洋を渡った伝播によって大西洋を越える奴隷貿易がいかに重要であったか、そしてプランテーションの奴

隷労働者の果たした役割がアフリカ作物の定着・確立にとっていかに不可欠に重要であったのかに注目する。

II. アフリカにおける農業のドメスティケーション（栽培化・飼育化）とモンスーン交流

アフリカ人は、4000年以上以前に独自に農業の栽培化過程を開始した（Tab.1）。サハラ以南のアフリカを縦断する多様な生態的状况の中で、アフリカ人は9つの穀類、6つの根栽作物、5つの油脂（生産）植物、多くの野菜・果実・堅果類、6つの家畜用飼料作物を栽培化した（Fig. 1）。とりわけ、アフリカイネ、ソルガム（モロコシ）、ミレット（粟黍類）、ヤムイモは、アフリカ大陸の食事の大半にとって基本をなした。およそ3000年前、アジアから料理用バナナが入ってきて、アフリカの食料品目はさらに多彩になった。その1000年後、そのいそこ（近縁種）であるフ

Table 1 Selected Indigenous African Food Plants

Savanna Complex	
<i>Adansonia digitata</i> L.	Baobab
<i>Brachiaria deflexa</i> (Schumach.) C.E. Hubb. Ex Robyns	Guinea millet
<i>Ceratothera sesamoides</i> Endl.	Leaves and seeds
<i>Citrullus lanatus</i> (Thunn.) Matsum & Nakai	Watermelon
<i>Citrullus colocynthis</i> (L.) Schrad.	Bitter gourd
<i>Corchorus olitorius</i> L.	Bush okra/jute mallow (green)
<i>Cucumis melo</i> L.	Muskmelon
<i>Digitaria exilis</i> (Kippist) Stapf	Fonio
<i>Digitaria iburua</i> Stapf	Iburu/black fonio
<i>Hibiscus cannabinus</i> L.	Kenaf
<i>Hibiscus sabdariffa</i> L.	Roselle or sorrel
<i>Lagenaria siceraria</i> (Molina) Standl.	Bottle gourd
<i>Oryza glaberrima</i> Steud.	African rice
<i>Parkia biglobosa</i> (Jacq.) R. Br. Ex G. Don	Locust bean
<i>Pennisetum glaucum</i> (L.)	Bulrush or pearl millet
<i>Polygala butyracea</i> Heckel	Black beniseed
<i>Plectranthus esculentus</i> N.E. Br.	Dazo/Livingstone potato
<i>Sesamum alatum</i> Thonn.	Sesame: mucilaginous leaves
<i>Sesamum radiatum</i> Schumach. & Thonn.	Beniseed

<i>Solanum aethiopicum</i> L.	Guinea squash
<i>Solanum incanum</i> L.	Bitter tomato
<i>Solanum macrocarpon</i> L.	Nightshade
<i>Solenostemon rotundifolius</i> (Poir.) J.K. Morton	Coleus/Sudan or Hausa potato
<i>Sorghum bicolor</i> (L.) Moench	Sorghum/guinea corn
<i>Vitellaria paradoxa</i> C.F. Gaertn.	Karité or shea-butter tree
<i>Xylopia aethiopica</i> (Dunal) A. Rich	Guinea pepper
Humid Forest Complex	
<i>Aframomum melegueta</i> K. Schum.	Malaguetta pepper
<i>Abelmoschus esculentus</i> L.	Okra, gumbo
<i>Amaranthus lividus</i> L.	Green amaranth
<i>Blighia sapida</i> K.D. Koenig	Akee apple
<i>Cajanus cajan</i> (L.) Millsp.	Pigeon pea
<i>Celosia argentea</i> L.	Celosia
<i>Coffea robusta</i> Linden	Coffee (robusta)
<i>Cola acuminata</i> (P. Beauv.) Schott & Endl.	Kola nut
<i>Cola nitida</i> (Vent.) Schott & Endl.	Kola nut
<i>Cucumeropsis edulis</i> (Hook. f.) Cogn.	Egusi melon
<i>Dioscorea bulbifera</i> L.	Aerial potato yam
<i>Dioscorea cayenensis</i> Lam	Yellow guinea yam
<i>Dioscorea dumetorum</i> (Kunth) Pax	Bitter/three-leaved yam
<i>Dioscorea praehensilis</i> Auct. PP.	Bush yam
<i>Dioscorea rotundata</i> Poir.	White guinea yam
<i>Elaeis guineensis</i> Jacq.	Oil palm
<i>Gossypium herbaceum</i> L.	Cotton
<i>Kerstiingiella geocarpa</i> Harms	Kersting' s groundnut
<i>Momordica charantia</i> L.	Bitter melon/African cucumber
<i>Piper guineense</i> Schumach & Thonn.	Guinea pepper
<i>Sphenostylis stenocarpa</i> (Hochst. ex A. Rich.) Harms	yam bean
<i>Tamarindus indica</i> L.	Tamarind
<i>Telfairia occidentalis</i> Hook. f.	Fluted pumpkin
<i>Vigna subterranea</i> (L.) Verdc.	Bambara groundnut
<i>Vigna unguiculata</i> (L.) Walp.	Cowpea/black-eyed pea
Ethiopian/ East African Highlands Complex	
<i>Avena abyssinica</i> Hochst.	Ethiopian oats
<i>Catha edulis</i> Forssk.	Chat
<i>Coccinia abyssinica</i> (W. & A.) Cogn	Anchote
<i>Coffea arabica</i> L.	Coffee (arabica)
<i>Eleusine coracana</i> (L.) Gaertn.	Finger millet
<i>Ensete ventricosum</i> (Welw.) Cheesman	Enset
<i>Eragrostis tef</i> (Zucc.) Trotter	Tef
<i>Guizotia abyssinica</i> (L.f.) Cass.	Niger seed
<i>Lablab purpureus</i> (L.) Sweet	Lablab or hyacinth bean
<i>Musa ensete</i> J.F. Gmel.	Ensete
<i>Ricinus communis</i> L.	Castor bean

Sources: Blench 2006, 205; Harlan 1975, 71-72; MacNeish 1992, 298-318; Vaughan and Geissler 1999, 10, 26, 38, 128, 174; Marshall and Hildebrand 2002, 123-124.

Areas of Domestication of Selected African Crops

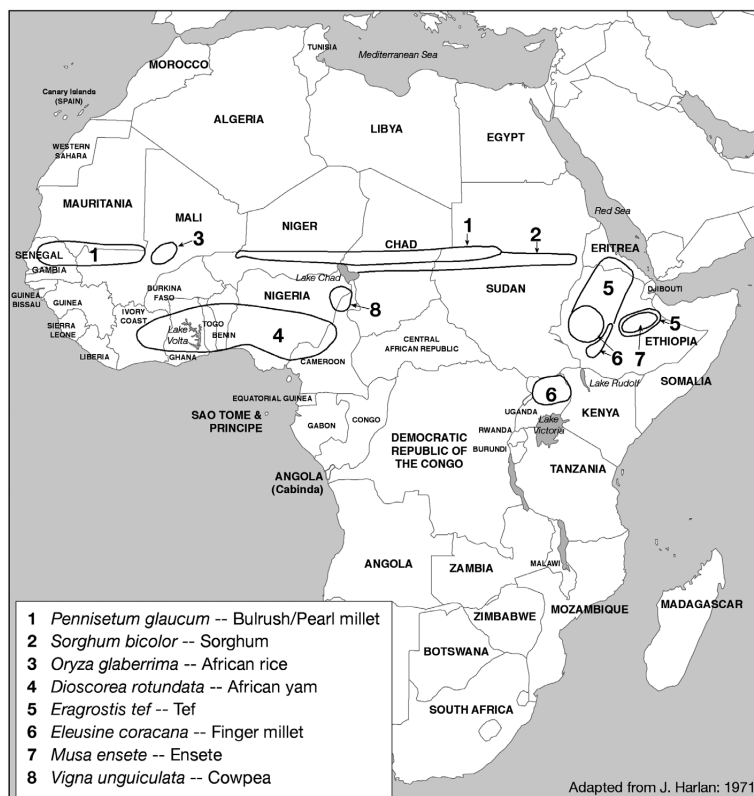


Fig. 1

ルーツバナナが、別のアジアの主要作物タロイモとともにアフリカにたどりついた。ポルトガル人が15世紀末にアフリカ大陸を周回航海したときまでに、アフリカ人は料理用バナナやフルーツバナナについての専門的知識を培っていたので、西－中央アフリカと東アフリカにそれぞれ、各根栽作物の多品種化の二次的中心を成長させるに至っていた²⁾。

しかし、古代におけるアフリカのアジアとの植物学的な交流は、ただ一方向だけになされたのではない。アジアの根栽作物がアフリカ大陸にやってきたちょうどその時期に、アフリカの栽培植物群はインド洋を越えて輸送され、同じようにアジアの食物体系を革新した。アフリカの主要食料のなかで移動したも

のとして顕著なものは、ソルガム、ミレット、ハトマメ、フジマメ、ササゲ、それに近縁の「アジアの」長豆 (*Vigna unguiculata subsp. sesquipedalis*)、オクラ、スイカ、タマリンド (ナツメヤシ)、それにおそらくはゴマである。それらの作物の移動にとってのインド洋の重要性が確認され、ある歴史家は適切にも、この時期の古代植物移動を「モンスーン交流」と呼んでいる。千年紀以上も後のコロンブス交流と対照的に、モンスーン交流は古代インド洋の交易ルートに大西洋との新たな関係をもたらした (Fig. 2)³⁾。

より早い時期のアフリカ作物のアジアとの交流を無視したために、コロンブス交流学説にはいくつかの偏見 (視点の偏り) がもちこ

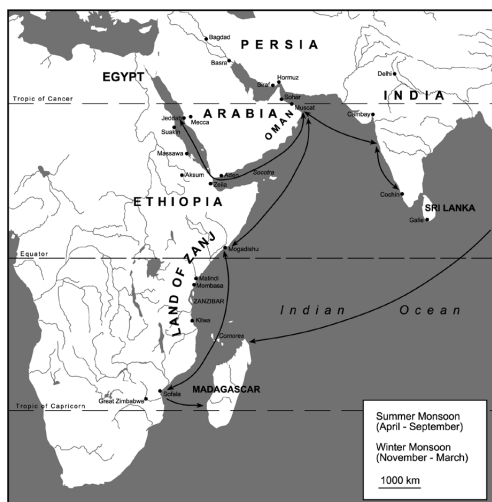


Fig. 2

まれてしまっている。大陸間の植物の移動にアフリカの植物種と諸民族が果たした貢献は、全く調査されていないか、あまり重要でないものとして提示されているかである。古代アジアの食事において重要となった主要食料を栽培化することに（アフリカ）大陸の諸民族が果たした役割については、言及されていない。また、これらの諸民族がアジアの作物を主導的に取り入れたことや、新たな品種の開発に情報を提供した専門的能力についても言及されていない。その代りに、アフリカ大陸の植物史はアフリカ大陸以外の人々の働きによって彩られている。すなわち、まず、アジアのサトウキビとアフリカのソルガムを中世に地中海にもたらしたイスラム教徒 (Fig. 3), それから新大陸の作物を持ち込んだヨーロッパ人である⁴⁾。

コロンブス交流は新大陸とアジアの植物資源を世界に拡大するのにヨーロッパ人が果たした主導力を強調することによって、このアプローチのよい例となっている。アフリカは、ある作物が当初栽培化された地域を強調する際に全くその話のなかからぬけ落ちてしまう。コロンブス交流説の視点は、植物学の



Fig. 3

知識体系、大陸間の植物移動、作物の栽培実験と採用の展開の点で、アフリカ大陸とその諸民族が果たした非常に重要な仲介的役割を小さくみている。コロンブス交流の文献は、ヨーロッパ人がアジアの多くの主要食料—たとえば料理用バナナと食用バナナ—に、アフリカにおいて最初に遭遇したことに注目できておらず、大陸間の植物移動史においてアフリカ大陸とアフリカ人を周辺に追いやっている。

ヨーロッパ人による領土の植民地化と作物の伝播の意味を過少に損なおうというのではない。そうではなく、私の意図は、コロンブス交流の文献が提供する以上に、近代初頭の世界における植物交流についてもっと完全な説明を提供することにある。ヨーロッパの商業上および領土上の植民地にいる先住民が発展させた知識体系とその知識を集め、手に入れ、移動したヨーロッパ人の努力との間の複雑な関係は、他の場合にも見ることができる。ヨーロッパ人だけが大陸から大陸へ有用な栽培植物（たとえば料理用バナナ）を移動した行為者ではない。アフリカ人奴隷は、みずからの故郷から南北アメリカへの強制的な

移住に際して、種子や根栽植物だけでなく、それらを耕作し加工する知識体系をも運んだのである。

Ⅲ. アフリカの植物の南北アメリカへの伝来：「奴隷によってもたらされた」作物

植民地の時代に自給のため奴隷が栽培した食料についてのヨーロッパ人の説明が不足しているにもかかわらず、アフリカ人奴隷によって特定の作物が導入されたことが確かに言えるはっきりした事例が2～3個はある。トマスジェファーソンは、「ゴマはニグロ（黒人）によってアフリカからサウスカロライナにもたらされ、ニグロだけがこれまでカロライナ州とジョージア州で栽培してきた」ことを主張しているが、これは、特定の植物の導入を直接奴隷に拠ったプランテーション社会の観察者の言葉をおうむがえしに述べたものである。大英博物館の創始者ハンス＝スロウンが1680年代にジャマイカを訪問したとき、彼は奴隷たちが栽培しているさまざまな食用作物について解説した。そのなかには、ミレット（黍・粟）、ソルガム、彼にとって目新しい食料たとえばオクラや「一番小さなエンドウよりも小さい（黒い目がついた）白エンドウ」が含まれていた。これはアフリカのササゲで、その特徴的な外観にちなんで、イギリスの植民地では黒目豆（ブラックアイピー）として知られるようになった。1741年に書かれたジョン＝オールドミクソンのイギリス植民地の経済史は、ヤムイモもまた「ニグロによって海の向こうの彼方へもたらされた」ことを初期のファーストハンドの根拠を引いて主張した⁵⁾。これらの食用植物はそれぞれ熱帯アフリカの起源で、大半がそれ以前にヨーロッパ人には未知であった。

大西洋の奴隷貿易の間に伝来したアフリカ作物のリストには、大陸の栽培植物24種以上が含まれる（Tab.2）。ヨーロッパ人は最初にこれらの作物の大半が奴隷の玄関先の前庭や

食料畑で育っているのを見た⁶⁾。最初のころのこれらの記録やアフリカの栽培作物が定着したプランテーション社会の場所は、いくつかの興味をそそる問題を提起する。どのようにして作物群が当地に到着したのか。どのようにしてその栽培が確立したのか。奴隷たちはその耕作を自分たちで開始したのか。

私が今執筆している著書『記憶の種子：黒人の大西洋におけるアフリカの植物学的遺産』は、奴隷船の船長たちが捕えた人々のための供給としてアフリカ社会から日常的に食用作物を買っていた方法を文書で証明している。文書記録は奴隷船に供給する食料貿易において現地のアフリカ作物が重要であることを強調している。新大陸のトウモロコシも購入された供給品のなかの特色ある品物であるが、アフリカの栽培植物も数多く存在した。奴隷商人たちは日常的に自分たちの船に、古代から熱帯アフリカで栽培されてきたソルガム、ミレット、イネ、ヤムイモを、料理用バナナとともに供給し、所蔵していた。奴隷船においてアフリカの食事の主要食品が重要であることは、奴隷を運搬する際の自給主要食の重要性を強く示している。しかし、アフリカからの伝来物資のことは、ヨーロッパから持ち込まれたトウモロコシが16世紀アフリカに革命的な役割を果たしたことを最優先して強調するコロンブス交流の文献には、ほとんど触れられていない。

奴隷船は、それに乗ってアフリカの諸民族とアフリカ大陸の主要食料が新大陸のプランテーション社会に到着する輸送機関として役立った。それらの大半の作物はプランテーション発達の初期の時代に定着した。16世紀初頭、アフリカヤム（*Dioscorea cayenensis*）は自給作物としてカリブ海一帯で広範に栽培されていた。奴隷たちは、とりわけサトウキビを栽培する島嶼地帯の半乾燥地域やもっと乾燥するリーワード諸島（小アンティル諸島北部）において、ソルガムとミレットを主要

Table 2 African plant introductions in slave food gardens in early colonial period

Cereals		
Millet	<i>Pennisetum glaucum</i>	B, Ca, H, Hi, J, L, Po, S, We
Sorghum	<i>Sorghum bicolor</i>	Ca, H, Ha, Hi, K, L, Ma, Pu, S
Rice	<i>Oryza spp</i>	H, Hi, Ho, Hu, Mc, Pr, S, Wl, Wo
Tubers		
Yams	<i>Dioscorea cayenensis</i>	B&P, Ca, H, Ha, Hi, O, OM, Pr, Pu, S, St
Plantain/Banana	<i>Musa spp</i>	H, Ha, Hb, Ku, O, OM, Pr, Pu, S, St
Taro	<i>Colocasia esculenta</i>	F, He, K, W
Legumes		
Black-eyed pea/cowpea	<i>Vigna unguiculata</i>	B&P, K, L, S, Sp, Wl
Pigeon pea	<i>Cajanus cajan</i>	B&P, H, Hi, Pr, Pu, St
Bambara groundnut (Voandzeia)	<i>Vigna subterranea</i>	M, Pr
Lablab/hyacinth bean	<i>Lablab purpureus</i>	F, Je, K, L, M
Oil Plants, Fruits, Fiber		
Sesame/bene	<i>Sesamum radiatum</i>	Hu, M, P, S, W, Wl
Castor bean	<i>Ricinus communis</i>	C, F, K, M, Mc, S, V
Oil palm	<i>Elaeis guineensis</i>	H, S, V, Wl
Watermelon	<i>Citrullus lunatus</i>	B&P, Hi, Hu, P, St
Muskmelon	<i>Cucumis melo</i>	K
Kola nut	<i>Cola acuminata</i>	E, P, V, Wl
Ackee	<i>Blighia sapida</i>	E, P
Kenaf	<i>Hibiscus cannabinus</i>	
Beverages		
Coffee	<i>Coffea spp</i>	Pr, Pu
Tamarind	<i>Tamarindus indica</i>	H, Hb, Hi, M, Pu, St
Hibiscus	<i>Hibiscus sabdariffa</i>	F
Vegetable and spices		
Okra	<i>Abelmoschus esculentus</i>	B&P, F, He, Hi, Hu, K, M, P, Pr, S, St
Sorrel	<i>Hibiscus sabdariffa</i>	
Spinach or calalou	<i>Amaranthus dubius viridis</i> or <i>Corchorus olitorius</i>	C, F, Hi, V, Wl
Melegueta pepper	<i>Aframomum melegueta</i>	H, He, Ho, K, M, V
Guinea squash	<i>Solanum melongena</i>	He, Ho
Utility		
Bottleneck gourd	<i>Lagenaria siceraria</i>	V, W
Luffa	<i>Luffa aegyptiaca</i>	K
Kenaf	<i>Hibiscus cannabinus</i>	Hi
Fodder		
Guinea grass	<i>Panicum maximum</i>	A, B&P, D, P, S
Para/Angola grass	<i>Panicum muticum</i>	D, R

Code:

A= Ayensu, Jamaica, Martinique, Guadeloupe
B=Barbot, French Guiana
B&P=Berleant and Pulsipher, Montserrat and Barbuda
Ca= Catesby, the Carolinas
C&A=Coe and Anderson, Nicaragua
D=Debret, Brazil
E=Edwards, Jamaica
F=Fredrich, St. Lucia
H=Hall et al, NE Brazil
Ha=Handler, Barbados
Hb=Humboldt, Colombia
He=Hess, Virginia
Hi=Highfield, Danish West Indies
Ho=Hohne, Brazil
Hu=Hurault, French Guiana
J=Jordaen, Curaçao
Je= Jefferson, Virginia
K=Kimber, Martinique
Ku=Kupperman, Providence Island
L=Labat, Martinique and Guadeloupe
M= Marcgrave, Pernambuco, Brazil
Ma=Marshall, Windward Islands
Mc=McClellan, Saint Domingue
O=Oviedo, Spanish Caribbean
OM=Oldmixon, Barbados
P=Parry, Barbados and Jamaica
Po= Postma, Curaçao
Pr=Price, Suriname
Pu=Pulsipher, Montserrat
R=Roig, Cuba
Ru= Rutten, Curaçao
S=Sloane, Jamaica
Sp=Sparks, South Carolina
St=Stedman, Suriname
V=Voeks, Bahia
Wa=Watts, Caribbean
W=Wilson, South Carolina
We=Westergard, Danish West Indies
Wl=Warner-Lewis, Trinidad
Wo=Wood, South Carolina

食料として植えた。ソルガムは、アフリカの穀類がそこで生育するのをみつけた奴隷船の船長が作成したフランス領ギアナの17世紀のスケッチにおいても重要な位置を占めている (Fig. 4)⁷⁾。イネは、ジャマイカ、サウスカロライナ、ブラジル、ギアナ地帯のプランテーション経済初期における奴隷の食物耕地のなかにあらわれる。穀物群を適切な栽培環境に適合させるために、イネが生育する地域から来た奴隷たちはサウスカロライナとブラジルにアフリカの日常食の主要食物の栽培を開拓した。彼らの努力によって農場主がイネをプランテーションの輸出作物として採用する礎

となった。ブラジルの19世紀に描かれた絵画のなかには、奴隷たちが稲藁で作られたレインコートを着ている様子を描いたものすらある (Fig. 5)⁸⁾。

いまだはつきりわかっていない何らかの方法で、初期植民地時代の奴隷たちはアフリカの日常の主要食料を手に入れた。奴隷航海の最後にたまに残っている根栽作物や未製粉の種子が、おそらく植える材料になったのであろう。奴隷船は食料品店のようにアフリカの日常食の主要食料を運んだ。同時に船倉はそれらの栽培や調理加工に長けた人々を抱えていた。このようにして、奴隷たちは自分たち

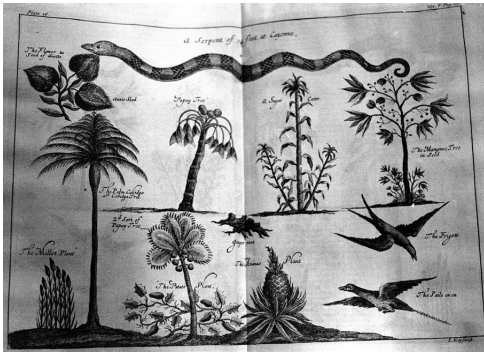


Fig. 4

の菜園にアフリカ人の日常食で好まれる作物を再定着させた。

古文書記録は、奴隷船の船長たちがしばしば殻つきのアフリカ穀物（イネ、ソルガム、ミレット）を購入したことを示している。粗い穀類は、より安い値段で売られしかもより長持ちする。しかし消費するためには消化困難な外皮を取り除くため航海の間じゅう製粉を必要とした。アフリカで女性によってなされたこの仕事は、どうやら奴隷船へとうけつがれた。少なくともある程度の奴隷航海では、奴隷の女性たちが殻のついた穀類の調理加工の仕事につかされたことが、航海日誌簿に記載されている⁹⁾。製粉加工は一枚の18世紀オランダ絵画（1785年ころ）に描かれていて、2人の女性の奴隷がおそらくはミレットとおもわれる穀類を奴隷船 *Fredensborg* 号の後甲板で搗いているのを示している（Fig. 6）¹⁰⁾。2人の女性は、アフリカ風に、いっしょに、2人とも杵を持ち、交互に穀物が盛られた臼を搗く、穀類を製粉する様が描かれている。図6は、*Fredensborg* 号が殻つきの穀類を購入し、船が大西洋を渡る間に手による加工を実行すべく捕虜の女性たちに頼っていることを、視覚的に確認している。

しかしながら、船長たちが奴隷航海のために殻つきの穀類を購入した事実は、別の理由にとっても重要である。大西洋横断で残った未製粉の穀物群はすべて新たに植物を定着さ



Fig. 5

せるための種として役立ったのである。このようにして、奴隷たちはこれまでと同様に、アフリカの主要食料を得られたし、自給用（生活の糧）としてその耕作を始めたのである。スリナムからブラジル東部アマゾン地域までの南米北東部一帯の孤立小村の逃亡奴隷（maroons）の子孫の間で収集された口承の歴史は、この解釈の正しさを支持する。これらの逃亡奴隷のコミュニティは、穀物の伝来を奴隷航海で残った穀類に起源させる（さかのぼらせる）。彼らの話は、イネのはじまりを奴隷女性の祖先に帰する。その女性がせり街で奴隷船へと売りに出された時に髪の毛の中に穀物を隠したという。これらの種子をたずさえて、彼女はイネの栽培を新大陸に持ち込んだのである¹¹⁾。

自給用の畑で奴隷たちが栽培した食用作物に関する初期の記事を検討すると、それまではプランテーション経営者が知らなかった多

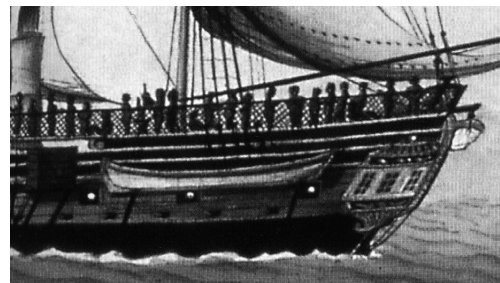


Fig. 6

くのアフリカ産栽培植物の存在が明らかになる。これらのアフリカから持ち込まれた植物群は、一スロウンやジェファーソンや他の人の記録が示すように一奴隷の自給用菜園において最初にヨーロッパ人の関心をひいた。プランテーションが発展した時期には、食料はしばしば供給が不足がちであった。プランテーション経営者たちは、奴隷たちに十分な食料を供給する責任を破棄することで悪名高かった。彼らは、奴隷たちに食料栽培のために独立した割当農地を与えることによって、彼らが奴隷に十分な食事を提供しなければならない法律を出し抜こうとした。プランテーションの造成のために森林を拓き輸出商品の栽培をする、骨の折れるような日々ののち、奴隷たちは残った労力を基本的な栄養上のニーズを獲得することに捧げることを余儀なくされた。もしそうしなければ栄養状態が悪くなって餓死の危険すらあるので、彼らの選択は容赦ないものだった¹²⁾。生存の糧（自給）のための食料生産は、熱帯アメリカにおいて、ヨーロッパ人にはほとんど未知の栽培方法と作物を必要とした。

アフリカの作物の伝来は、新大陸の熱帯における栽培にとって理想的に適していた。ヤムイモや料理用バナナやタロイモなど新大陸に持ち込まれたいくつかの根栽作物は、新大陸のマニオクよりも好まれた。なぜなら消費に加工する際に追加的な労働を必要としなかったからである。種子植えの他のアフリカ作物は、それらの作物を個々の地域の生育条件に適合させる際に奴隷の専門知識・技術に依存した。時として、奴隷の食料用農地で奴隷所有者がみつけた植物は、商品としての潜在的可能性すらもっていた。イネ、黒目豆（アフリカササゲ）、ゴマなどはそのような例だった。これら3つの栽培植物はすべてその後植民地時代の間に順次商品（作物）として生産された¹³⁾。

奴隷たちは、玄関前庭の菜園や独立した食

料用農地を、新大陸と旧大陸の熱帯民族たちが累積的に成し遂げてきた植物学的達成を実験栽培するために用いた。奴隷たちがアフリカの日常食料の嗜好品栽培を開始した食料用農地は、このようにして、熱帯アメリカの食料（獲得）方法を形成する孵化場（練習場）として役立った。プランテーション経済の合間にあって、生存の糧（自給）に捧げられた場所において、黒い大西洋の奪われた人達は、独自の耕作体系を作りだした。その耕作体系は、商品生産の耕作体系に変化を与えた。これらの「放浪に追い立てられ権利を失った人々の植物園」は、アフリカの栽培植物の「離散少数集団」にとって足場を提供した。これらの植物菜園は植民地時代の植物交流ネットワークの一部として議論されたり概念化されることがこれまでほとんどなかった。

活動する植物学者として、奴隷アフリカ人たちは熱帯アメリカの農業体系を形成した。旧大陸の熱帯の主要食料を定着させるのに奴隷が果たした役割は、初期プランテーション時代の記載の中で時に言及されることはあるが、コロンブス交流説で紹介されることはない。大陸の主要食料を定着させるのに果たしたアフリカの役割のプロセスを、私たちはさらに別の方法で—すなわち、アフリカ人が新大陸の植民地の言葉に持ち込んだ共通の名称を検証することによって、確かめることができる。多くのアフリカから持ち込まれた植物種はアフリカの地名によって知られている。地名に由来する名前は、たとえば、ポルトガル語のサントメバナナ、キマメ（リュウキュウマメ）に対する英語のアンゴラ豆ないしコンゴ豆、あるいはフランス語のアンゴル豆のように、直接、西アフリカや中央アフリカの主要な奴隷港に関連している。他の植物は、記述語として、ヨーロッパ人が大西洋横断奴隷輸送時代のアフリカ大陸につけた地理的ラベル「ギニア」を冠している。英語だけでも、

主たる伝来作物として、ソルガムを指すギニアコーン、ギニアカボチャ、ハイビスカスを指すギニアカタバミ（ギニアツツジ）、ギニアコショウ、ギニアグラス（ギニアキビ）、ギニアニワトリ（ホロホロチョウ）などがある。ポルトガル人やスペイン人がヨーロッパの海外領土を拡大し始めたので、イベリア地方の言語の例はもっと豊富にある。たとえば、アフリカ起源の語バナナは、キューバ東部、コロンビア、エルサルバドルの旧プランテーション地域ではギネオス *guineos* と呼ばれている (Fig. 7)¹⁴⁾。そのような地理的記述語は、歴史的に大西洋の奴隷貿易の時代の中にアフリカからの伝来作物を位置づけるそれらの作物についての社会的記憶を表している。

新大陸のプランテーション経済にアフリカ大陸の主要食料を定着させるのにアフリカ人奴隷が果たした非常に重要な役割は、それらのアフリカでの名前が新大陸の植民地の言語に名をとどめている食用作物を検証すること

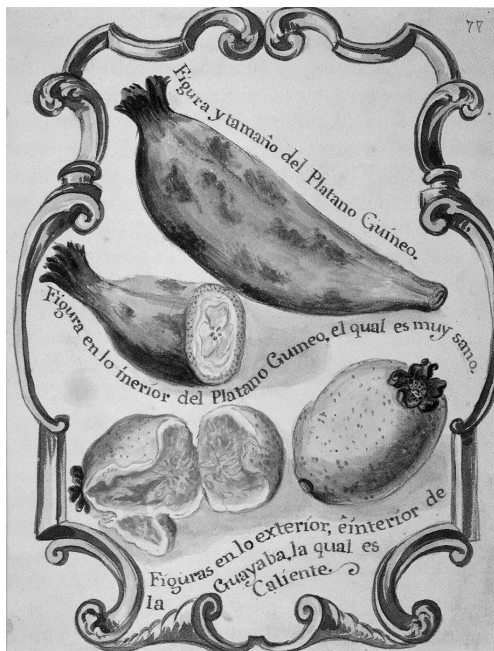


Fig. 7

によっても説明することができる。これらの事例は、それらを栽培するにいたるのにアフリカ人の主導性が重要な意味をもったことを明確に示している。この事例として、*nname* の名をもつヤムイモ、*oko* ないし（英語の *gumbo* がこれに由来する）*quigombo* の名をもつオクラ、*guandú* の名をもつキマメ、*benne* の名をもつゴマ、*bissy* の名をもつコーラナッツ、*eddo* の名をもつタロイモ、*dênde* の名をもつパームオイルがある¹⁵⁾。旧大陸熱帯地方のこれらの植物は熱帯アメリカに入植したプランテーション所有者には目新しいものであり、奴隷たちが栽培していた食料用菜園で発見されたものであった。それらもまたヨーロッパ人が奴隷が持ち込んだと主張した作物である。アフリカ人が持ち込んだこれらの作物は、奴隷の料理人が調理した食事を通じて、白人のプランテーション所有者の食料品一覧に静かに浸透していった。アフリカの食料がプランテーション表に載ることになったとき、奴隷所有者は奴隷たちがそれらに対して用いている名前を単に借用した。このようにして、アフリカでの名前が新大陸の植民地の言葉へと推移していったのである。今日わたしたちはこれらの伝来作物をアフリカからの離散集団の料理の成分（要素群）をはっきりさせるものと考えている。しかし、大西洋を横断する奴隷貿易の時代には、これらの作物は奴隷たちが集団で生き延びるのに貢献した栄養上不可欠の補給物資を供給したのである。

IV. 結論

アフリカ大陸の食用作物の遺産は新大陸の熱帯地方にプランテーションの奴隷制の初期時代に到着した。これらの作物群は、生存の糧（自給）を確立しそれらを新たな環境に適応させるために奴隷たちが払った努力によって、日常食の主要作物として広がっていくことになった。アフリカから持ち込まれた作物

群は、奴隷の食事に重要な貢献をし、さらにアフリカ人の食事の好みを南北アメリカにおいてある程度再構成することも可能にしたけれども、この植物交流が想像を絶する最も厳しい状況下で起こったことは忘れてはならない。コロンブス交流の学説が語らないアフリカの植物の伝来は、同じ時代にヨーロッパ人によって仲介された作物群とは別に、非常に意義深い方法で確固と存在している。プランテーション労働者として細々とした生き方に直面した奴隷たちの生き残りにその作物群は貢献したのである。しかしながら、主要食物としてそれらの作物が定着したのは、他のいかなる南北アメリカ移住集団も直面することがなかった厳しい状況下においてのことであった。

奴隷たちはプランテーション経済の食料品リストをアフリカナイズしたが、彼らは生存の糧の（自給）畑を（クロスビーの言葉を借りれば）新アフリカ化に変形する以上のことを成し遂げたのである。プランテーション経済下での生存（生き残り）は、耕作に適した作物を選択し、それらを奴隷所有者たちが食料を植えるためにまさにとっておいた周辺的な環境に適合させることができるかどうかにかかっていた。奴隷たちは、ヨーロッパ人たちが従属させた新大陸と旧大陸の熱帯から来た諸民族が累積的に成し遂げた植物学的諸成果を礎にして、自らの生存（生き残り）を築いた。アメリカインディアンの諸種族が16世紀初頭に急速に減少して多くのカリブ海諸島から姿を消したので、彼らが植物学上達成していた諸成果は奴隷としてアメリカインディアンに着実に代わったアフリカ人たちに受けつがれたのである。アフリカ人奴隷たちはこれらの結合された植物学的資源を利用して、16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ人の世界的な領土拡大がもたらした状況を生き延びるべく苦闘したのである。コロンブス交流は、植物群の地理的起源と大洋間の伝

播にヨーロッパ人が果たした役割に焦点を当てた。そのために、私たちは、大西洋を渡った奴隷制、奴隷となったアフリカ人、旧大陸の熱帯食用主作物の新大陸プランテーション社会への移動などの重要性から注意をそらしてしまった。世界の植物史における生存の糧（自給）と食用作物の重要性を強調することによって、大陸間植物移動の議論におけるアフリカの再定置（位置づけの見直し）が必要ながことがこうして明らかになった。このようにして、インド洋と大西洋の体系を過去数千年紀にわたって橋渡ししようとするときに、その諸民族、植物資源、知識体系の点において、アフリカ大陸の中心性を理解することができるのである。

謝辞

この原稿の旧バージョンに対する Haripriya Rangan と Richard Rosomoff の深く考えられたコメントに対して著者は心から感謝する。

〔注〕

- 1) ①Alfred W.Crosby, *The Columbian Exchange. Biological and Cultural Consequences of 1492* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1972). 『コロンブス交流 1492年の生物学的・文化的意義』。② Alfred W.Crosby, *Ecological Imperialism: The Biological Expansion of Europe, 900-1900*, (New York: Cambridge University Press, 1986). 『生態学的帝国主義：900年から1900年における生物学的なヨーロッパの拡大』。さらに次の文献を参照。③William Beinart and Karen Middleton, “Plant Transfers in Historical Perspective: A Review Article,” *Environment and History*, 10 (2004) : 3-29. 「歴史的視角における植物の移動 展望論文」。
- 2) アフリカにおける野生バナナの栽培とその軌跡に関する人の心を引きつける話については次の文献がいっそう詳しい。①Edmond de Langhe “Banana and Plantain: the Earliest Fruit Crops?” *INIBAP Annual Report*, 1995, pp. 6-8. 生食用バナナと料理用バナナ 最

- 初の果実作物？②E.R.De Langhe, E.R. Swennen, and D.Vuysteke, “Plantain in early Bantu world,” *Azania*, 1994-95 (29/30) : 147-160. 初期バンツー世界における食用バナナ。③Julius Leijou, P.Robertsha, and D. Taylor, “Africa's earliest bananas?” *Journal of Archaeological Science*, 33 (2006) : 102-113, 特にp.108. アフリカの最初のパナナ？
- 3) アジアの long bean については、次を参照。NRC (National Research Council), *Lost Crops of Africa, Vol. II: Vegetables* (Washington, D.C: National Academy Press, 2006), pp.223-33. 『アフリカの失われた作物 第二巻野菜』。アフリカの植物栽培については次を参照。①Daniel Zohary and Maria Hopf, *Domestication of Plants in the Old World* 3rd ed. (Oxford: Oxford University Press, 2000), 194. 『旧世界における植物の栽培化』。②Roger Blench, *Archaeology, Language, and the African Past* (Lanham, Maryland: Altamira Press, 2006). 『考古学, 言語, アフリカの過去』。③R.Blench, “The movement of cultivated plants between Africa and India in prehistory,” in K.Neumann; A.Butler; and S.Kahlheber, eds., *Food, Fuel and Fields...progress in African archaeobotany* (Cologne: Heinrich-Barth-Institute, 2003), 281. 「先史時代のアフリカとインドの間の栽培植物の移動」『食料, 燃料, 農地: アフリカ考古植物学の進歩』所収。④Jack Harlan, *Crops and Man* (Madison, Wisc.: Crop Science Society of America, 1975). 『作物と人間』。⑤Richard MacNeish, *The Origins of Agriculture and Settled Life* (Norman: University of Oklahoma Press, 1992). 『農業と定住生活の起源』。⑥R. Marshall and E.Hildebrand 2002. “Cattle Before Crops: The Beginnings of Food Production in Africa,” *Journal of World Prehistory*, 16(2): 99-143. 「作物以前の家畜: アフリカにおける食料生産のはじまり」。⑦J.G.Vaughan and C.A.Geissler, *The New Oxford Book of Food Plants* (Oxford: Oxford University Press, 1999). 『食用植物についての新オックスフォード図書』。「モンスーン交流」の用語は次の歴史家に拠る。J.R.McNeill, “Biological Exchange and Biological Invasion in World History,” in Sølvi Sogner, ed., *Making Sense of Global History* (Oslo: Universitetsforlaget, 2001), 106-119. 「世界史における生物学的交流と生物学的侵入」『地球史を理解する』所収。
- 4) 11世紀ころのスペインにおけるソルガムのさし絵。出典: 許可を得て復刻。14世紀後半イタリアの写本。Ibn Butlān (d.1066), *Tacuinum sanitatis*, (Österreichische Nationalbibliothek, Ser. Nov. 2644, fol. 48v.
- 5) ①Randy Sparks “The Emergence of Afro-Atlantic Foodways,” in Jeffrey Pilcher (ed.), *Food, Drink, and Memory in the Carolina Low-country and the Caribbean*, (Columbia: University of South Carolina Press, forthcoming). 「アフリカ・大西洋の食料群の道の誕生」『カロライナ低地とカリブ海地方の食料, 飲料と記憶』近刊, 所収。②E.M. Betts (ed.) *Thomas Jefferson's Garden Book, 1766-1824* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1944), p.368. 『トマス・ジェファースンの菜園図書, 1766-1824』。③John Oldmixon, *The British Empire in America Containing the History of the Discovery, Settlement, Progress and State of the British Colonies of the Continent and Islands of America*, 2 vols. (New York, Augustus M. Kelley, [1741], 1969), II: 16. 『イギリスのアメリカ大陸および島嶼植民地の発見・入植・成長・国家の歴史を含むアメリカにおける大英帝国』。
- 6) ブラジルにおける「黒人の住居」あるいは奴隷地区。出典は次のとおり。Johann Moritz Rugendas, *Viagem Pitoresca através do Brasil* (São Paulo: Livraria Martins Editôra, 1954 [1821-25]), plate 4/5, following p.205.
- 7) ミレットとソルガムは大西洋横断奴隷貿易では現実にはともにミレットと呼ばれていた。絵画からは植物が実際はソルガムであったことがわかる。Jean Barbot がいう「南北ギニア海岸とエチオピア内陸部の描写, いわゆるアンゴラ, アフリカの西部海岸地方の新しい正確な説明」が次の巻に載っ

- ている。vol. V of Awnsham Churchill, *A collection of voyages and travels, some now first printed from original manuscripts, others now first published in English*, 8 vols. (London: printed from Messieurs Churchill, for T. Osborne, 1752), Vol. V: Plate 16, p.200.『航海と旅行のコレクション、一部は原版からまず印刷され、残りは英語でまず刊行された』。
- 8) Judith Carney, *Black Rice: The African Origins of Rice Cultivation in the Americas* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001).『黒いイネ：南北アメリカにおけるイネ栽培のアフリカ起源』。絵画「稲藁で作られたレインコート」Jean Baptiste Debret, *Viagem Pitoresca e Histórica ao Brasil*, 2. Vols. (São Paulo: Livraria Martins, c. 1820s [1940]), I: Plate 42, with text on p.257.
 - 9) 未製粉の穀類は、胚と保護殻を残し、長い航海をよりよい状態で切り抜ける。Judith Carney, “Out of Africa: Colonial Rice History in the Black Atlantic,” in L. Schiebinger and C. Swan (eds.), *Colonial Botany: Science, Commerce, and Politics in the Early Modern World* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2005), pp.204-220.「アフリカから出て：黒人の大西洋における植民地時代のイネの歴史」『植民地時代の植物学：近代初期の世界における科学・商業・政治』所収。女性たちがまた奴隷船乗組員によって清掃と料理に従事させられることについては、次を参照。Robert Harms, *The Diligent: A Voyage through the Worlds of the Slave Trade* (New Haven: Yale University Press, 2002), 312-313.『勤勉な人たち：奴隷貿易の世界航海』。
 - 10) デンマークの奴隷運搬船 Fredensborg II の絵画。1785年頃。デンマーク海事博物館 (Kronborg, Denmark) の許可を得て複製。
 - 11) J. Carney. Rice and Memory in the Age of Enslavement: Atlantic Passages to Suriname, *Slavery and Abolition*, 26, no.3 (2005): 325-347.「奴隷制時代のイネと記憶：スリナムへの大西洋航路」。J. Carney. ‘With Grains in Her Hair’: Rice History and Memory in Colonial Brazil, *Slavery and Abolition*, 25, no.1 (2004): 1-27.「髪の中に入れて：植民地時代ブラジルにおけるイネの歴史と記憶」
 - 12) James E. McWilliams, *A Revolution in Eating: How the Quest for Food Shaped America* (New York: Columbia University Press, 2005).『ひとつの食の革命：食料に対する探求がいかにアメリカを形成したか』; Judith Carney, *Seeds of Memory*, forthcoming.『記憶の種子』近刊。
 - 13) アメリカ独立戦争に先立つ時代、北アメリカ本土のプランテーションはイネと黒目豆(ササゲ)を食料が不足するさとうきび諸島に輸出していた。
 - 14) 絵画 “Plátano Guineo (Banana) and Guavas,” 1763年頃。出典: Joaquín Antonio de Basarás, *Origen, costumbres, y estado presente de mexicanos y Philipinos*, (アメリカヒスパニック協会 (New York) の好意による転載許可)。
 - 15) 北アメリカ南部植民地でピーナッツに対して用いられた goober の語さえ、西アフリカ起源である。南アメリカの栽培植物は実際には西アフリカから北アメリカ本土に到着した。そこでは、アフリカ人によって16世紀初頭に栽培植物が持ちこまれ栽培された。①Jonathan D. Sauer, *Historical Geography of Crop Plants* (Boca Raton, FL: CRC Press, 1993), 82-83.『作物植物の歴史地理学』。②Andrew Smith, *Peanuts: The Illustrious History of the Goober Pea* (Urbana: University of Illinois, 2002).『ピーナッツ：Goober Pea の輝かしい歴史』。作物の名前がアフリカ言語由来のものについては、次の文献を参照。I.H. Burkill, “The Contact of the Portuguese with African Food Plants Which Gave Words Such As ‘Yam’ to European Languages,” *The Linnean Society of London*, Part 2 (1938): 84-95.「ヨーロッパの言語にたとえば「ヤム」という言葉を提供したアフリカの食用植物とポルトガル人との接触」。H.M.Burkill, *The Useful Plants of West Tropical Africa* (Kew, England: Royal Botanic Garden, 1985-2000), 5 vols.『熱帯西アフリカの有用植物』。

【訳注】

- 1) Columbian Exchangeは、コロンブスのアメリカ大陸発見以降に展開したアメリカ大陸の交易、つまりアメリカと他地域との物資等の交換（相互移動・相互交流）を指す語である。したがって「アメリカ交易」の訳語となる。しかし、別にAmericaの語も本文中

に頻出するので、両者の弁別が困難になる。Columbianの語はChristopher Columbusにちなんでできた語であり、著者カーニー自身が冒頭に1492年を契機としたColumbian Exchangeに言及していることも踏まえ、「コロンブス交流」と訳す。